

日本兵が銃殺される現場 ぼくは見てしまった

街メガロポリス

017 Megalopolis

中国東北部(旧満州)で過ごした幼少時代や、敗戦の混乱の中で引き揚げ体験とその後を、漫画「丸出だめ夫」などで知られる森田孝次さん(89)「写真、横浜市金沢区」が「だめ夫伝——我思我漫画の人生」にまとめた。東京の出版社が企画した漫画家の引き揚げ体験記録の第1弾。第2弾は「約りバカ日記」の北見けんいちさん(67)を予定している。

(森田孝次)



引き揚げ体験「だめ夫伝」

漫画家森田さん「いつも犠牲は子ども」



森田さんは1939年、生後3カ月で両親に連れられて旧満州・奉天(瀋陽)に渡った。45年8月、ソ連軍が侵攻。日本人男性は連行され、女性は男殺してソ連兵の目を惑わせるように過ごした。6歳だった森田さんは日本兵がソ連兵に銃殺されるの

も見た。

引き揚げが始まると、6歳だった弟を「5000円で売れ」と中国人が訪ねてきた。父母は断ったが、遊び仲間のなかには売られた友達も数人いた。殺戮する大人たちには「引き揚げはされないようにして、やっとなどり着いた引き揚げ船、そこでも友達の一部が力尽きて亡くなっ

た。80年代、勉強も運動も苦手な小学の男の子とモンゴロポツ母ちゃんは、「子どもは見てはいけない」といったが、僕は大人数の膝の間から、4人の日本兵が殺される現場を見てしまった。「だめ夫伝」から

トが繰り返されるロタバタ劇を描いた連載漫画「丸出だめ夫」や「ロボタン」でヒット作を連発。テレビドラマ化やアニメ化で売れっ子になってからも、ベトナム戦争を子どもの目線で風刺する漫画を自費出版した。逃げまどる子どもたちに自らが重なった。

ただ、自身の戦時体験を残せないかと考え始めたのは50歳を過ぎてからだ。55年には北見さん、「あしたのジョー」のちばてつやさん(69)、2日に2歳で亡くなった「天才バカボン」の斎藤不二夫さんら、引き揚げ体験を持つ漫画家と音楽を出した。

そして今回、引き揚げ体験と再び向き合うまでの半生を描いた

約70枚とともに、文章も原稿用紙約70枚に書き下ろした。

執筆時は無意識だったが、新著のなかで何度も重ねて記していた言葉がある。いつの戦争も大人が始め、犠牲者は子どもだ

「少年誌に書いてきた僕にとっては、子どもたちが楽しくいられるかが、すべてなんです」

企画した「クリエイティブ21」の倉田貴代さん(38)は「だめ夫を知る人も、知らない子どもたちにも読んでほしい」。ちばさんにも執筆を依頼するといふ。B5判、105頁、1500円(税抜き)。問い合わせは朝日(03・3229・6・5290)。